

航海をめぐる歌謡：タビパイ（旅栄え）の アークについて

上原, 孝三 / UEHARA, Kouzou

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

143

(終了ページ / End Page)

204

(発行年 / Year)

2002-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002570>

航海をめぐる歌謡

——タビパイ（旅栄え）のアーグについて——

一、はじめに

航海は常に危険を孕んでいる。コンピュータを搭載し、近代科学の粋を集約した現代の船での航海もまた例外ではない。航海技術の発達した今日でさえ、海は人間の力の及ばぬ部分や側面を色々持っている。まして技術の発達がそれほどでない社会においては、海の恐ろしさ、不気味さは一層であつたらう。

かつての帆船での航海は、風・時化・暴風や潮流などの自然現象に左右され、ともすれば漂流・難破の危険性が付き纏っていた。それは現代の比ではなからう。島から島へ渡るとき、あるいは「唐

上原 孝三

御嶽名	神名(性)	祈願目的
瀝水御嶽	恋角(男神) 恋玉(女神)	首里天加那志美御前御為、 諸船海上安穩之為、諸願
広瀬御嶽	真しらへ(女神)	船路の為
大城御嶽	豊見赤星てたなふら真主(女神)	船路の為、諸願
中間御嶽	赤皿の赤台の真主(男神) 浜の里主(女神)	船路の為
新城御嶽	白鳥の舞鳥のつかさ(女神)	船路の為、諸願
池間御嶽	おらせりくためなふの真主(男神)	船路の為、諸願
野猿間御嶽	きやひかさ主(男神) おもいまらつかさ(女神)	船路の為、諸願

れ、また御嶽の由来・起源を記録している(注②)。

御嶽名・神名(性)・祈願目的につきまとめてみると次のようになる。

二、近世の航海

「大和旅」「先島旅」「沖繩旅」に出発する際に、交通の手段として用いた近世期の帆船は現代から言えばちやちやな乗りものであるが、それでも人は乗ったし乗らねばならぬ場合もあった。目的を果たせばそれでよし、運悪く不幸にして目的を達せず旅先で客死、あるいは海の藻屑と消え去った人も少なくない。時として、旅は人々の運命を翻弄したのである。

出立する者、それを見送る人の胸中に何が去来したのであろうか。人々は航海の安全と目的の達成・成就、無事帰還をひたすら願ったに違いない。近世琉球では、国家・寺社・個人それぞれのレベルでの航海安全の儀礼が存在し、神仏に祈り加護を求めたのである(注①)。「旅グエーナ」・「旅バイヌアーク／旅ハイヌアーク」(旅栄えのアーグ)・「旅カロイノアヨウ」等は、そのような航海の場や航海に関する儀礼を通して伝承され、その人の無事と航海安全を目的として謡われた。

本稿では、宮古諸島に伝わる「旅バイヌアーク／旅ハイヌアーク」(旅栄えのアーグ)を取り上げ、文献資料と伝承歌謡を用いながら、歌の持つ力・機能を考察したい。「タビバイヌアーク」・「タビハイヌアーク」は、[tab²ipain agū]・[tabhain agū]と表記されるが、前者はほぼ宮古一円での発音であり、後者は平良市池間・西原・伊良部町佐良浜のいわゆる「池間民族」のそれである。

宮古の最古の文献『御嶽由来記』(一七〇五年)には二五の御嶽の名称・神名・性・祈願目的が記さ

『御嶽由来記』にみえる御嶽の数は二五である。その内の一六は「船路の為」を祈願の目的にして
 いる。これらの一六の御嶽は宮古でもいわゆる古い集落に存在し、渚の近辺かそこから程遠くない場

赤崎御嶽	大世主豊見屋(男神)	諸願
西新崎御嶽	高神(男神)	諸願
大泊御嶽	おもいまら(女神)、まつめか(女神)	諸願
川嶺御嶽	世の主かね(男神) 金めか(女神)	諸願
真玉御嶽	かねとの(男神) まつめか(女神)	諸願
石城御嶽	あからせと弓矢取真主(男神)	諸願
喜佐間御嶽	真種子若按司(男神)	諸願
乗瀬御嶽	玉めか(女神)	諸願
比屋地御嶽	豊見氏親(男神)	諸願

島尻御嶽	まひとまらつかさ(女神)	船路の為、諸願
大御神御嶽	豊見大あるす(男神) 豊見かめあるす(女神)	船路の為、諸願
船立御嶽	かねとの(男神) しらこにやすつかさ(女神)	船路の為、諸願
離御嶽	離君あるす(女神)	船路の為
山立御嶽	おたはる(女神)	船路の為、諸願
池の御嶽	君あるす(男神) きゆらにやす(女神)	船路の為、諸願
高津間御嶽	のしてた(男神)	船路の為、諸願
嶺間御嶽	あまれふら(女神) 泊主(男神)	船路の為、諸願
浦底御嶽	盛大との(男神) 豊見屋(女神)	船路の為

所に現在も位置しており、「船路の為」つまり航海安穩目的の祈願を叶うに相応しい場にあるといえる。一六の御嶽とは、漲水御嶽・広瀬御嶽・大城御嶽・中間御嶽・新城御嶽・池間御嶽・野猿間御嶽・島尻御嶽・大御神御嶽・船立御嶽・離御嶽・山立御嶽・池の御嶽・高津間御嶽・嶺間御嶽・浦底御嶽の嶽々である。

『御嶽由来記』の「大安母みやまいりの事」(一七〇七年・首里王府への追補報告)によれば、右記の一六の御嶽で「首里天加那志美御前御為併島中作物おきなかなし上下船々為御たかへ大安母主取にて嶽々のつかさ相勤」たようである。この文脈からすると、「船路の為」の祈願は「おきなかなし上下船々為」に行なうものであったと考えられるのである(勿論、他の旅の航海安全の目的の為に祈られたであろう)。

一六の御嶽は公儀御嶽であり、そこで祈願する「つかさ」は首里王府に認められた者であり、「大安母みやまいりの事」には、「御嶽拾六御前御座候津かさ拾六人有之候」ともあるので原則として一つの御嶽に一人の「つかさ」がいたことになる。

「つかさ」|| 神女は、「おきなかなし上下船々為」に各自管轄の御嶽で「御たかへ」を行なった。「御たかへ」とは、航海安全の神への願い事(ニガイフチイ・願い口)であろう。「おきなかなし上下船々」とは、首里王府への貢納物を積んだ船、即ち「春立船」と「仲立船」である。「大安母みやまいりの事」には、「春立船」と「仲立船」がいつ沖繩に向け出航するとは記していないが、春三月と

夏八月の年二回の沖繩旅であった。「船路の為」の祈願は沖繩旅に向けての航海安全、公用が無事済むようにとのそれが目的であったのだ。

「おきなかなし上下船々」に乗船する人々は公務執行に従事するが、それは生命を賭けた危険な旅でもあった。乗船する人々とその家族はもとより、為政者、神女(つかさ)といった社会の様々な階層レベルの人々が、航海安全は勿論のこと公務の執行と無事帰還を願ったのは想像に難くない(注③)。このような背景から「旅栄えのアーグ」は生まれ支持されたのであろう。

さて、右記の表の「祈願目的」に「諸願」があるがそれは具体的に如何様な祭祀であったのか。「大安母みやまいりの事」には

- 一、二月中ニ麦初御祭の事
- 一、四月中ニ米粟初御祭の事
- 一、九月中ニ世のため御たかへの事
- 一、十月中ニ火用心御たかへの事

と五つの祭祀があり、一六の御嶽でそれらの五つの祭祀が営まれたことを物語っている。「春立船」と「仲立船」には、麦・米・粟などの貢納物が積まれたのであろう。大城御嶽のように「祈願目的」

に「諸願」よりも「船路の為」が優先的に記述されているのは、貢納船（その乗船員も含める）がいに無事に首里に到着して欲しいかの意識の表れであり、かつまた関心事でもあったのだろう。

右記の二五の御嶽には「船路の為」の祈願よりも「諸願」の祈願が多い。「諸願」の記載がないのは、漲水御嶽・広瀬御嶽・中間御嶽・離御嶽・浦底御嶽の五つの御嶽である。漲水御嶽は宮古を代表するそれだから敢えて「諸願」の記載をしなかったのであろうか。広瀬御嶽・中間御嶽・離御嶽・浦底御嶽の四つの御嶽では「船路の為」の祈願はするが「諸願」をしなかった。

むしろここで問題とされるのは、「諸願」の祈願の中に「船路の為」の祈願、つまり航海安全の祈願が包括されるのではないか、という見方である。つまり、二五の御嶽で「船路の為」の祈願を行なったということになる。だが、広瀬御嶽・中間御嶽・離御嶽・浦底御嶽の四つの御嶽で「諸願」の記載がないのは（記載されなかったのは）何故なのかの説明できなければ、「諸願」の祈願の中に「船路の為」の祈願が包括されるという考え方は成立しない。もし、「船路の為」が「諸願」の中に包括されるのであれば、「諸願」の記載で充分事足りていたはずである。筆者は四つの御嶽で「諸願」の記載がないのはそれなりの理由が存在していたと考えている。ここで、「離御嶽」の例を示そう。

東平安名崎の海上に浮かぶ小島がいくつかある。離御嶽は、その小島のなかでも比較的大きな島にあるといわれる。そこは海鳥が繁殖するに都合のいい場所だが、人間はかつて住んだことがないといわれているし、また住みようがない島である。木々は一本も生えてないし、岩礁だけの島である。離

御嶽のある小島には、香炉があるという人もいるし、無いと言う人もいる。いずれにせよ、太平洋の荒波に洗われる離御嶽のある小島に近づくことも困難だという。

離御嶽は『御嶽由来記』に次のように記されている。

離御嶽女神離君あるすと唱

船路の為め崇敬仕候事

由来昔神代に右神はなり山に顕れ船守の神とならせ給ひたるよし云伝有崇敬仕候事

『御嶽由来記』では、「はなり山」と記されているが、宮古島のことをかつて「太平山」と表記したように、山は島を意味しよう。従って、「はなり山」＝離島になる。それはともかく、昔、離島に女神が降臨した。「船守の神とならせ給ひ」たのであった。女神はつまるところ航海安全の神である。農耕が一切できない小島で、航海に因する以外の祭祀儀礼、つまり「諸願」ができればよいはずもない。「船路の為」の祈願のみがなされるのは当然であろう（注④）。

現在、離御嶽は城辺町字保良の管轄にある。旧暦二・三月の祭に保良のツカサ（神女）が離御嶽に行くという。目的は恐らく「船路の為」の祈りであろうと思われる。

二五の御嶽につき、「船路の為」「諸願」がそれぞれ単独で記されたり、併記されているのは「船

路の為」を強調したい歳元の論理が働いていたと思われる(注⑤)。首里王府への納税と「船路の為」の祈願は強く関わっていたのである。

明治二九年の一二月に宮古に渡島した田島利三郎は、約一カ月の滞在で古文獻を書写し、一方では宮古最初の歌謡集『宮古島の歌』を編纂し、精力的に調査活動した。『宮古島の歌』(注⑥)には、「旅葉意安屋期七篇」と題し、タヒパイアヤゴ(タヒハイアヤゴ)七首を載せている。「出船祝言(1)」「板敷払祝言(2)」「送年日祝言(3)」「迎歳祝言(4)」「帰帆待祝言(5)」「屋良婦種(6)」「石嶺の道(7)」がそれである。一連の歌として捉えていたのであろう。

「出船祝言(1)」

旅葉意の真道乗安期とそ 船ばいの真艦ぬり安期とそ 大親主の主たむめのおいせの 嘉例吉ん御物積でやまれば 三艘船んみやもの積てやまれば 宮古皆の立の数御物や	旅葉えの真道乗り 船栄えの真艦乗り 大親主の親方の仰せで 嘉例吉に御物を積んであるから 三艘船に貢物を積んであるから 宮古の皆の立て数の御物は	海上安全のアーグをしよう のアーグをしよう のアーグをしよう であるから であるから の御物は
--	--	--

御藏中 蔵の宮寄をとい 嘉例吉ん積ぬゆせおきばど 真南風根や立直り押れば 肝急げ船出せやまれば 網取やはぬ引やねほさせ おきなとん美御前とんもたせば 波や押さいや押ぬけとい 一夜こめ明りすとむでんや 嘉例吉が艦真ん中から 久場おたけ前立拜めば 鳴拝み並ほこりしゆれきやや 那覇湊直指しべやれいけ 隣だけや里だけ通ふにやん 端もらせ満つなけな今の梶	御藏中蔵の貢物を取り寄せ 嘉例吉に積み乗せてあれば 真南の風が吹き押しはじめたので 心急いで船出をすれば 網を取り引き帆をさせて 沖繩まで御前まで持たせると 波は押し合い押しかけて 一夜を籠め明けての早朝には 嘉例吉船の艦の真中から 久場御嶽が前方にみえるので 島を押し島並みを讃えるうちに 那覇港を目指し走り行け 隣や里に通うように 船端を盛らし満つように梶をとれ
--	--

田島は、「出船祝言(1)」「板敷払祝言(2)」「送年日祝言(3)」「迎歳祝言(4)」「帰帆待祝

言(5)「屋良婦種(6)」「石嶺の道(7)」を一連の歌と理解したようだが、どのような根拠でそのようなグループヒングしたのか不明である。

(1)から(5)の五首は、航海安全と首里王府への貢物・納税をモチーフとしているが、残りの二首は航海と関係すると思われるが、愛しい人の無事等を祈るのがモチーフであり、明らかに五首とは異なる。

「出船祝言(1)」は宮古から沖繩への旅の歌であり、「帰帆待祝言(5)」は逆のそれである。「板敷私祝言(2)」「送年日祝言(3)」「迎歳祝言(4)」はどのように考えればよいのであろうか。沖繩で長期に滞在し、年を送り、迎えたのであろうか。「送年日祝言(3)」「迎歳祝言(4)」は、沖繩で年月を送り、新たな年を迎える内容的になっている。公用が終了するに半年以上も沖繩に滞在したということであろう。

「板敷私祝言(2)」は、那覇まで無事に着き、公用を済ませる予祝の歌である。「板敷私(いたじきばらひ)」とはどういうことなのか。『全国方言辞典』(注①)は、「祭礼又は婚禮などの翌日の慰勞宴」とある。同辞典に拠れば、その言葉の使用例地域は「宮崎・大分・長崎県五島」となっている。つまり、「いたじきばらひ」は祭祀儀礼に関連することはあつて、九州・沖繩地域で使用される言葉であるということになろう。

宮古の場合の「いたじきばらひ」は、航海安全の儀礼の翌日に行なわれた慰勞の宴になるのであるうか。

「いたじきばらひ」は、首里王府でも行なわれた国家レベルの航海安全の儀礼であるようだ(注②)。首里王府の国レベルの儀礼が、地方である宮古でも同様な儀礼が行なわれたことになろうか。もし、そうであるならば、国家・地方・村レベルで「いたじきばらひ」の航海安全の儀礼が行なわれたことになろう。

『伊良部郷土誌』によれば、琉球国王に貢納物を納めに行く際には、見送る人は「パナムツー(高台)」「へ登り、航海安全の祈願をし、泣きながら「たびばいのあやこ」を歌ったとある(注③)。前述の「船路の為」の祈願の実態の一部が窺い知れるのではなからうか。

航海安全の祈願式には、「パナムツー」では線香を焚き、洗米、塩、酒を供え、恙なく大任を果たして、帰れるように祈願し、貢航したら焚き火して家族や親戚の居所を知らせ、船が池間島の岬を越して見えなくなるまで、黒い煙で合図して見送った」ようだ。このような行為は、昭和の中頃まで続けられたとし、次の歌(二首)を紹介している(注④)。

たびばいのあやこ(航海安全の歌)(一)

○オイテンー

上天の

ヤゴミウイノ、ミオブキヨ
タオト

○カギタビノ、

チュラタビノ、アヤゴソイイ、
タオト

○カギタビザアヨ、

ヌヌバイイ、イツウヤバイイ、
タオト

○ヌヌガウイカラ、

イツウガウイ、カラテイヨ、
タオト

かぎたびのあやこ(航海安全の歌)(二)

神の お陰

尊い

美しい旅の

清ら旅の 歌を添え

尊い

美しい旅は

布柴え 糸柴え

尊い

布の上から

糸の上 からと

尊い

○カギタビノヨ、

マムツノオリ、アヤゴシユウトイヨ、

美しい旅の

真道乗り 歌を謡って

タオト

○カカリテイヤヨ

ツカテイヤヨ、ニヤアダナヨ、
タオト

尊い

障害とは

差し支えとは なくて

尊い

嘉例吉(航海安全)は

願っていて 到着させよう

尊い

美しい旅は

小さい針を 通すように

尊い

嘉例吉(航海安全)は

真道から 航海安全させるよ

尊い

○カリユシヤヨ

マムツカラド、カユウシミデヨ
タオト

○カギタビヨパー

パリガマラ、トウスタキヨ
タオト

○カリウシヤラパー、

ネガユトイ、ツカサデヨ
タオト

○カギタビヨパー

パリガマラ、トウスタキヨ
タオト

○カリユシヤヨ

マムツカラド、カユウシミデヨ
タオト

「たびばいのあやこ」と「かぎたびのあやこ」は、貢納船を見送る時に謡われたようだが、一首目は「布の上から／糸の上から」つまり凧いだ海の上を滑るように船が航行してほしい、との願望を込

める。二首目は「障害」や「差し支え」、つまり時化や風による航海における困難がなく、目的地まで一直線を通れるような航海であれかしと航海安全を願う歌の内容である。

その後、右記の二首は、「入賞、応召、本土や沖繩で勉強している学生、更に本土へ移住する人々のため」にも謡われた。つまり、右記の二首は何らかの理由で島外へ出る人の為にも航海安全を祈り謡われるようになった。必要に応じ歌の機能の転用を行なっているのである。「詩の悲愴な表現は感傷的なメロデーと相俟って聴く人をして涙を誘う」(注⑩)とあるが、それは別離の悲しみであり、あるいは今生の別れであるかも知れないという想いに支えられたものであろう。見送る側はシイマ(村・島)を出る人の為に、村・個人レベルの儀礼として旅の安全を祈り続けてきたのであった。

だが、それにしても右記の二首は男(達)が謡ったのが、それとも女(達)が謡ったのか俄に判断できない。多分女(達)が謡ったものと思われる。そして、この二首は確実に第二次世界大戦までは謡われたのである。速度の速くなった近代の汽船が登場すると、謡う速度(メロディー)もアップテンポになったという(注⑪)。時代や状況に応じ、歌い手(達)が自らの判断で自在に謡ったことを意味しよう。時代が変遷しても船旅には「たびばいのあやこ」と「かぎたびのあやこ」は、航海安全を祈る歌として近世期から近代まで機能し続けてきたのである。

三、船神とタビバイヌアグの起源

船神とタビバイヌアグの起源を語る話がある。『雍正旧記』(注⑫)の「金志川城」の条に次の記事がある。

事例1

右城致破壊少々根積は爾今有之候城主金志川豊見親童名なきたつと申人正徳八年琉球上國之
 砌国土安穩舟路の爲め大盤若経六百卷御記念之はい津、奉頂戴持下り至爾今子孫に相伝申候
 豊見親事八重山島討入之時仲宗根豊見親に附随罷渡忠義有之人に而候処崎原かわらと申もの
 逢讒言当島之仲宗根豊見や童名兼盛より討果為申由候此豊見親船神と旅行之方崇敬仕候事

右の記事によると、「金志川豊見親童名なきたつ」は、正徳八年(一五一三年)に「琉球」より「国土安穩舟路の爲め大盤若経六百卷」を頂戴し、宮古に持ち帰った。彼は「八重山島討入之時」の豪族の一人であり、功績のある人物であったが、「崎原かわらと申もの」の「讒言」に逢い討ち果たされてしまった。その後金志川豊見親は「船神」として崇敬された、ということである。

金志川豊見親が「船神」として祀られるようになったのかについては、彼が「琉球」と宮古(城地

方)間を往復可能とする航海術・占星術の知識を有していたからであろうし、何よりも「国土安穩」と「舟路の爲め」に「大盤若経六百卷」を頂戴し、宮古に持ち帰ったからであろう。『球陽』(注⑩)はこの当たりの事情を次のように説明している。

事例2

是の年の夏、中山に赴き往き、帰米するの時に当り、大盤若経六百卷を買得して本島に帰り至る。茲よりの後、毎年四季、壇を設け経を唱へて、恒に国泰く民安く、船穩やかに往来するを祈り、以て伝家の至宝と爲す。(中略・引用者)後世の人、以て水程を掌司し、船隻を守護するの神と爲し、恒に以て崇信す。

『雍正旧記』と『球陽』とでは大盤若経六百卷の扱いについて異なっている。前者では首里国王より「奉頂戴持下り」とあるに対し、後者では「買得して本島に帰り至る」とあり記述は違うものの、金志川豊見親は「毎年四季、壇を設け経を唱へて、恒に国泰く民安く、船穩やかに往来する」ことを祈ったので「船隻を守護するの神」としたのであった。つまり、金志川豊見親は「船神」でありかつまた「船隻を守護するの神」でもあるとするのである。

正徳八年(一五二三年)といえば、古琉球期である。金志川豊見親はその功德により人が神になった例であり、しかも「船神」・「船隻を守護するの神」の男神であることは興味深い。何故なら近世琉球社会の中では、航海安全の神として「オナリ神・媽祖・観音などいづれも女性の靈的優位を特徴とする信仰」(注⑪)が存在したからである。この問題は、時代・地域・風土・歴史・文化が絡みあっているのが一概に論ずることはできないが、神観念と神信仰を探る材料として注目される。さて、「船神」・「船隻を守護するの神」としての金志川豊見親を謡った歌がある。

旅菜えのアーグ(伊良部町佐良浜)

1 たびいばいぬヨ

旅菜えの

まんちいんぬいヨ あやこそでいヨ

真道上りのアヤゴ(歌)をしよう

マトモ カリウシヤ ナウレ

真鱸 嘉例吉 稔レ

2 ふなばいぬヨ

船菜えの

まとうかよいいぬヨ いちゆにそでいヨ

真渡通いの 糸音をしよう

シタイ カリウシヤ スイナウレ

シタイ 嘉例吉 添工稔レ

3 たびばいやヨ たるがにだていヨ

旅菜えは だれでもが根立てる

むぬあらんヨ

ものではない

マトウム カリウシヤ ナウレ
 4 ふなばいやヨ いでいがしいたていヨ
 むぬあらんヨ

カリウシヤ スイナウレ

5 きんしいがーぬヨ

とうゆみやヨイしゅーどうヨ

にだていうちいヨ

カリウシヤ スイナウレ

6 まいぬヨーヤーぬイ

ぶじゃしやヨしゅーがどうヨ

しいたていやいヨ

マトウム カリウシヤ ナウレ

真鱸 嘉例吉 稔レ

船栄えは だれもが仕立てる

ものではない

嘉例吉 添工稔レ

金志川の

豊見親主が

根立てておいた

嘉例吉 添工稔レ

前の家の

叔父主が

仕立てた

真鱸 嘉例吉 添工稔レ

この歌は、「旅に出る者の航海安全を祈願して、浜に出て歌った」とある(注⑩)。歌詞の内容が途中で省略されており、詞章はまだ続くと思われる。「船神」・「船隻を守護するの神」としての金志川豊見親は、「旅栄えのアーグ」で歌われる。「旅栄えのアーグ」は、航海安全を意味するので金志

川豊見親は、航海安全の神ともいえる。

「旅栄えのアーグ」は、金志川豊見親が創ったものだという内容になっているが、実際に彼自身が創ったとは思われない。金志川豊見親の功績を讃え、彼と同時代もしくは後世の人々が創ったものであろう。

不当な理由により悲劇的な死に方をする金志川豊見親は、そもそも城の金志川(現在の城辺町友利)を代表する豪族であり、また城勢力の中心的人物であった。平良地方を中心とする仲宗根豊見親(玄雅・兼盛の親子)とは相拮抗する勢力関係にあった。二大勢力のバランスが金志川豊見親の死によって崩れた。

金志川豊見親は人々から慕われていたのであろう。『宮古島記事仕次』(注⑪)には、「此豊見親仁心深く民を恤む事赤子のことくなればむかしの目黒盛豊見親の化身にやと諸民も父母のやうにあふけたひしにおもはずも讒者の為にあいなくほろひし事情み悼すといふものなく其居所をあかめ尊んで今に金志川城とて諸人崇敬す」とあり、金志川豊見親がいかに優れた為政者であり、仁者であったかを記している。彼の死後、住居跡が拝所なっていること、そして「旅栄えのアーグ」に謡われていることから、そのことが窺い知れる。

歌の中に、「前の家の／叔父主が／仕立てた」とあることから、歌は金志川村を中心とした城一帯で謡われていたものが、宮古全域で謡われるようになったのであろうか。いづれにしろ、伊良部町佐

良浜に伝承される「旅栄えのアーグ」は、歴史上のある特定の人物と結びついている点に特徴がある。
『宮古島記事』(注⑥)に、「池間村おな崎の仲泊と申者地船通事役之時旅行のあやこ相始め候由來の事」と題する記事があり、次のように述べている。

事例3

右康熙初頃上国致し其時宮古島地船大和へ御米漕被仰付罷登候大和之洋中両水之渡中乗参り候最中俄に風波荒立乗船水船相究万死一生之躰罷成船中周章仕候此時仲泊一心不乱にして楫を抱き仏神に祈禱して宮古島の根所を感じあやこを唱楫全く取詰候付風波相鎮海路平安御園元上下無故障為致帰園由候夫より右あやこを旅はいのあやこと唱島中旅行の方は御国許旅歌の様吉瑞の門出と男女甲乙共謡ひはやり申候事

「池間村おな崎の仲泊と申者」が、大和旅の途中「風波荒立」て遭難しかかった。仲泊は楫を抱きしめ一心不乱に「神仏」に祈り「宮古島の根所」を崇べ「あやこを唱」えたところ、波風穏やかになり助かり無事帰島できた。その後、「池間村おな崎の仲泊と申者」が謡った歌を「旅はいのあやこ」と称すようになった。旅行する際には「吉瑞の門出」として「男女甲乙共謡」ったので、「旅はいのあやこ」は広く流行するようになったという内容である。この記事は、「旅はいのあやこ」の起源を

物語る伝承である。

「池間村おな崎の仲泊」が遭難中に謡った歌は即興歌かどうかは分からないが、もし全くの即興歌であるならば、「仲泊」は一度目と同様な「旅はいのあやこ」を二度とは謡えないだろう。一度しか謡えないような歌が流行ろうはずもない。従って、「仲泊」が謡った「旅はいのあやこ」はどこかに元となる歌があったらうと考えられるが、ここでは次のことを確認しておきたい。

- ① 「仲泊」が「宮古島の根所」を崇べ「あやこを唱」えたところ、波風は穏やかになった。
- ② 「仲泊」が謡ったあやこを「旅はいのあやこ」と称した。
- ③ ②に関し、「旅はいのあやこ」は旅行く前に門出の歌、つまり予祝歌として謡われた。
- ④ 「旅はいのあやこ」は男女そして身分の上下を問わず愛唱され、流行り歌ともなった。

右記の「旅はいのあやこ」がどのような詞章内容・旋律を有していたか不明であるが、流行り歌となるためには旋律は単純でなおかつ誰にでもすぐ覚えられるメロディーであること、つまり歌詞とメロディーが共有される基盤が必須の条件であろう。もしそうでなければ、男女そして身分の上下を問わず愛唱され、流行り歌と成り得るわけがないからである。

問題にしたいのは、①の「仲泊」が「宮古島の根所」を崇べ「あやこを唱」えたところ、何故波風

は穏やかになったのかであり、②の「仲泊」はいつ・どこで・どのような方法で「旅はいのあやこ」を知ったかである。また、「仲泊」は宮古島のどのくらいの御嶽名・神名を知っていたのかも不明であり、疑問は尽きない。

「宮古島の根所」とは、宮古の御嶽・拝所であろう。根所を崇めることは、その御嶽の神を崇めることであり、一種のカンナーギ（神名揚げ）である。ここで指摘すべき大切なことはカンナーギをし、歌を謡うことで危機を脱することができるということである。だが、そもそも何故歌を謡うことで危機を脱することができるのか。

慶世村恒任は『宮古史伝』の中で、「池間村おな崎の仲泊」の記事を紹介し、「旅はいのあやこ」について、「後世功德ある神歌として航海中盛に歌われたものである。音調悠々また高雅にして熱がある。今猶神前に於て広く歌はれている。」と歌のメロディーと謡われる場を記しているが、この言は慶世村自身が調査しその成果を述べたものと解される。調査しなければ、「音調悠々また高雅にして熱がある。今猶神前に於て広く歌はれている。」とは言えないからである。「今猶神前に於て広く歌はれている」という言説は慶世村の調査によるものであるが、慶世村の記述（コンテキスト）に従えば、「旅はいのあやこ」は

①「功德ある神歌として航海中盛に歌われたものである」が、それは船に乗船していた者、

即ち男性によって謡われていた。

②「今猶神前に於て広く歌はれている」のであるから、御嶽などで女性達（ツカサなど）によって謡われた。

となろう。①に関していえば、仄聞のところ航海中、洋上で男性が「旅はいのあやこ」を謡う例をしない。もしも、男性の航海中、その関係者である女性が男性の「航海中」に盛んに謡ったと解釈するならば、歌い手は女性であるが、前述したように「航海中」に盛んに「旅はいのあやこ」を謡うのはやはり男性だと慶世村はいう。「旅はいのあやこ」は、時代が下るに連れ、男性によって謡われなくなったのであろうか。

②に関しては、現在でも同様であるが、それは男性の「航海中」に謡われるのではなく、航海前であり祭祀儀礼のなかでも謡われるのである。

ともあれ、慶世村は「旅はいのあやこ」の謡われる状況のみならず、歌そのものも採集していたのである（注⑩）。

旅あやこ栄えのアヤコ

(上略)

かげたびの まみつのる アヤゴとそう

(悪なき旅のアヤゴをせう)

おぼとんな たるみあげ ふまあにアーン

(大海には何便る術もなし)

てんがみど ふもがみど みあげふま

(天と雲とを便るのみ)

ほんぶをば なしやるおや みあげにアーン

(本帆をば生みの父を便る如く)

やぶうをば なしやるむま みあげにアーン

(弥帆をば生みの母を便る如く)

かじからは ヤアのとすゆ だきにやんよ

(カシ柄をば家の妻を抱く如くによ)

(下略)

慶世村は「旅栄えのアヤゴ」を「康熙初年の頃の作」としているが、その根拠を明示していない。しかし、『宮古島記事』の「池間村おな崎の仲泊と中者地船通事役之時旅行のあやこ始め候由来の事」に拠っているのは疑いようがない。

また、「(上略) / (下略)」とあるように歌詞を全て載せておらず、どの地方の「アヤゴ」を採集したのかも記載してないので地点が不明なままである(恐らく平良地方の歌と思われる)。「此の歌は又近代まで帆船航海の時、義務的に洋中で誰にもうたはれたもの」と指摘している。「義務的に洋中で誰にもうたはれたもの」であるならば、歌い手は男性である。

興味深いことに、慶世村は「旅栄えのアヤゴ」を記した後で、それに関する神話を紹介している。長くなるが引用する。

池間島を東北に去る数里の洋上に、八重瀬といふ広大な暗礁と、富士といふて其の暗礁の東端の岩山が洋上に聳立つた所とがある。八重瀬には八重瀬渡賀殿と云ふ男神(之は弟)が居り富士には富士之美雅真良といふ女神(之は姉)が居て、これも航海の船を見つめてゐる。そして船が近寄ると弟なる男神は、黒牛(船)がおのれのニラ島(海)を踏み荒らし来たと云つて、船を暗礁にたきつけてやらうとするので、姉なる女神は驚いて之を止めようと思ひ、わざ／＼機に織りかけて居るブス(カスリ模様)を織りそくなつて「弟よ、只今、事知れぬもの織りなせり、早々に参られよ」とせき立てると姉思ひの弟は、何はさて措き急いで姉の所へ参るので、そのひまに船は難破を危かれて行き過ぎると云ふのである。それで航海者は女神に感謝の意を表わす為め、ブナリサズと云ふ布巾を準備して持つて居て、此の難所の前を通る時に之を鉢巻にし、旅栄えのアヤゴをうたつたと云ふことである。

この神話は、オナリ神思想と旅栄えのアヤゴとの結び付きを語るものである。旅栄えのアヤゴは船行きの安全を図り、「富士美雅真良といふ女神」に感謝の意を表わすため布巾を八巻にし船乗り達が

謡うのである。儀札歌として「旅業えのアヤゴ」の発生である。

一九二六(大正一五)年に宮古を訪れたロシア人ニコライ・ネフスキーは、平良町で「たびいばいぬあーぐ」二首を採集している。インフォーマントの名は不明であるが、歌そのものは直接そのインフォーマントから聴いたのであろう、国際音声字母を用い記録してある。ネフスキーは、歌の注釈で右記の神話を紹介した後で、次のように記している(注②)。

以前、狩俣 Ka²imata と島尻 Simaji の村落の住民が船で沖繩へ旅立つとき、船頭はみんな姉妹神に敬意を表わして buna²tsagi² へ姉妹の手拭いぐとよばれる、広く白い手拭いを頭にまき、 tabzi²ianu a : su (旅業いのアーク) へ旅の無事を祈る歌ぐの歌とともに旅にでた。

ネフスキーは、狩俣と島尻の両地に直接足を運び調査しているので、右記の注釈の説明はその地の人の可能性が高い。

「姉妹神」とは「富士美雅真良といふ女神」のことである。「村落の住民が船で沖繩へ旅立つ」のは私用なのか公用なのか分からない(恐らく公用であろう)。また、「歌とともに旅にでた」とあるが、船頭自身(船員も含む)が歌を謡いながら「旅にでた」のか、船頭達が歌に送られて「旅にでた」のか釈然としない。ともあれ、ネフスキーの説明では「たびいばいぬあーぐ」は、船の出帆ととも

にも謡われたということである。

(1) たびいばいぬあーぐ

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1 かぎたびいぬ | すばらしい旅の |
| まむついでいぬーい あやぐどう すーでい | 真道上のアヤグ〈歌〉をしよう。 |
| 2 みやくぬ しゅーどう | 宮古の主を |
| とうゆむ しゅーどう なーぎでい | 轟く主を名上げよう〈讃えよう〉。 |
| 3 ついかさやーぬ | ツイカサヤー〈聖地〉の |
| みやぬ ていんどう なーぎでい | 御家の天〈神名〉を名上げよう。 |
| 4 ついなびすいぬ | 網の錨の |
| な(ー)びすいぬ ぬすいとう なーがでい | 繩の錨の主を名上げよう。 |
| 5 まばいていん | 真南天〈神名〉を |
| みゅーにぬすいとう なーぎでい | 御船主を名上げよう。 |
| 6 しるばまぬ | 白浜の |
| かぎばまぬ ぬすいとう なーぎでい | 美しい浜の主を名上げよう。 |

- 7 りゅーぐていん
いむぬぬすいとう なーぎでい
- 8 ついな ばなし
うふ ばなし やらしは
- 9 いきやまざきい
ばなりざきい まーいたむ
- 10 やーびしぬーい
ふじならびい まーいたむ
- 11 ぶないがむ
ふじにかむ なーぎでい
- 12 いすつぬーい
みゅーにぬーい なーぎでい
- 13 びっしぬーい
まーむついぬーい なーぎでい
- 14 うぶとう いきい
とうなか いきい ばなんな
- 15 とーゆ みやーぎ
んじゅー みやーぎ ふま(ー)にやーん
- 16 ていんぬがみどう
ういゆがみどう みやーぎふま
- 17 ていんぬ みやーぎ
ういゆ みやーぎ あとうんな
- 18 しんどうーしゅー
ふなぬすいどう みやーぎふま
- 19 しんどうーしゅー
ふなぬすいが あとうんな
- 20 うぶぶーゆば
なしやるんま うがまでい
- 21 まいぶーゆば
なしやるーや うがまでい
- 22 かずいがまば
やーぬ とうずい みやーぎにやーん

- 龍宮天(神名)を
海の主を名上げよう。
綱を放し
もやい綱を放して(船を)やると
池間崎を
離れ崎を廻った。
八重千瀬上りへ並びを
フア岩並びを廻った。
ヲナリ神
フア岩の神を名上げよう。
イスチュ上りを
御船上りを名上げよう。
広瀬上りを
真道上りを名上げよう。
大渡(大海)を行く
渡中(航路)を行くときに、
- 誰を見上げようにも
何を見上げようにも何もない。
天だけを
上だけを見上げよう。
天を見上げての
上を見上げてのあとには、
船頭主を
船主を見上げよう。
船頭主の
船主のあとには、
大帆を
生んだ母(のように) 拝もう。
前帆を
生んだ父(のように) 拝もう。
舵を
家の妻を見上げるように、

23 やばやばとう

ぬかぬかとう ばなしき

24 ふみ きるま

なばみなとう びやりつき

25 だんなすいま

うやぬすいま うがまでい

柔々と

のびのびと離して行って、

久米島や慶良間に、

那覇港に走り着いて、

旦那島へ沖繩島へを

親の島へ沖繩島へを拜もう。

この歌の前半部分は、宮古から沖繩まで船の行く先々の航路に関連する地名とその地の神を嵩べる一種のカンナギ（神名揚げ）である。神を嵩べることにより守護されることになる。後半部分は船頭主と船を頼り慈しむ心情があふれ、目的地沖繩にたどり着くことを謡っている。

右記の歌の1節から23節は慶世村が採集した歌に相当しよう。ネフスキーの仕事により慶世村が部分的に記した歌の全貌が類推できる。

オナリ神思想は宮古地方ではその觀念が希薄だとされるが、かつては強固に意識されていたのであろうか。

「池間村おな崎の仲泊」の話を起源とする「旅はいのあやこ」と「八重瀬といふ広大な暗礁と、富士といふて其の暗礁の東端の岩山が洋上に聳え立つた所」で謡われる「旅栄えのアヤゴ」は同一の名

称を持つ歌であるが、果たして同一内容の歌であるかどうかは分からない。

『宮古島記事』の「池間村おな崎の仲泊」の記事を参照しつつ、「旅はいのあやこ」を自らのフィールドワークで知り得た慶世村は、やはりフィールドワークで採集した「八重瀬」の神話にみえる「旅栄えのアヤゴ」の存在も知った。両歌がいかなる関係にあるかに思いを凝らしたのであろう。このあたりの事情について彼は何も触れていない。だが、少なくとも慶世村の意識の中にはオナリ神思想と「旅栄えのアヤゴ」との強い関連性が描かれたのでないかと思われる。その証拠に「ブナリ」「サズ」の意味を解き、「ブナリサズ」を「姉の賜ひし布巾」と説明していることからオナリ神思想をかなり意識している。慶世村は「旅栄えのアヤゴ」の背景にはオナリ神思想が存在し影響を与えていたと想定したのではなからうか。ともあれ、「旅栄えのアヤゴ」は神前（御嶽）と航海中に謡われたと慶世村は指摘している。「旅栄えのアヤゴ」はオナリ神信仰と御嶽信仰と結びつき、その流れの中から派生してきたものと捉えられる。

四、海航く神女

船に乗るのは男性だけではなかった。女性もまた船に乗らねばならぬ場合もあった。役職上のこともあるし、必要に迫られてのこともあった。宮古最高の神女職は大安母である。大安母職は仲宗根豊見親の妻「おつめが」が最初に任命されたようだ。以来代々伝わってきたが、大安母職に就くには首

里王の任命が必要であった。任命式には首里城まで行かねばならなかった。女性もまた船に乗ったのだ。船に乗れば危険な目にも逢う。神女もまた遭難の憂き目をみる。『御嶽由来記』に載っている事例を記す。

事例1

嘉靖始頃母跡被仰付歳拾五歳の頃為御目見おきなか那し罷登帰帆之砌唐国漂着にて死す

首里国王に「御目見」するために沖繩（首里）へ上り無事目的を果たし、宮古へ帰る際に遭難し「唐国漂着」したがその地で死んでしまった。「右以上勤並次第相知不申候得共昔より咄伝来候付略記之」とあるように、右記の話は伝承による。嘉靖年間（一五二二～一五六六）は古琉球の時期である。大安母の勤め始めの年や勤め年数・次第は知らないけれども昔から語り伝えられた話であるから概略であるが記した、とある。実際には文献や語り伝えられてないが、その他にも遭難死や漂着の実例はあったものと推測される。

事例2

天啓五年乙丑年より被仰順治十一年甲午為御目見おきなか那し罷登帰帆之砌逢難風唐国漂着

にて死す

天啓五（一六二五）年に大安母職に任ぜられ、順治十一（一六五五）年に首里国王に「御目見」するために沖繩（首里）へ上り目的を果たしたが、宮古へ帰る際に遭難し唐国に漂着したがその地で死んでしまった。沖繩への上り下りの際、大安母が遭難に逢うので、昔は三年廻に上国だったが度々唐の国に漂着するので「順治拾十二乙未」（一六五六）年よりは、沖繩（首里王府）から召還があるときに行くことになったのである（注②）。

遭難に逢うが助かった事例もある。次の例は、嘉靖年間の頃の出来事であるので伝承である。

事例3

嘉靖年間頃為御目見おきなか那し罷登帰帆の砌於海中に波風猛敷罷成俄に女神現来宮古島漲

水御嶽に立願可仕由大安母より御告船中人数感悦不斜一所に相集拜候に付風波静に罷成唐国

漂着三年滞留帰島仕再度被仰出為相勤由候事

沖繩からの帰帆の時、波風が激しく時化たところ、突然女神が現れて漲水御嶽を拝みなさいと大安母に告げたので、大安母はその旨を船員に告げた。乗組員は喜んで全員一所に集まり祈願したところ

波風は静まり唐の国に漂着、滞在すること三年。その後、無事に帰島することができた。以上が大意である。

右記の話で、「俄に女神」が現われるがその理由が明記されていない。大安母の信仰心の篤き故女神が現われたということを読きたかったのか、あるいは「唐国漂着三年滞留帰島」できたのは女神が現われたからだということがいいたかったのか。あるいは両者か。ともあれ、女神の出現が危機からの脱出の契機であり、乗船者が助かったことは確かなことである。女神は航海安全の神になろう。

『琉球国由来記』(注②)の「神遊ノ由来」は狩俣村のウヤガン祭の起源・由来と祭りの形態を述べている。狩俣村の「ヨナフシ神遊」、即ちウヤガン祭は宮古一円に広まったが禁止の憂き目にあったことに続き、以下のようなことを記している。

事例4

経数ケ年、大川森ノ大阿母、御本国へ罷渡、帰帆ノ砌、逢大風、漂流スル処、空中、神アヤゴ聞得、青シバト申葛、船ノ艫ニ、落掛リケル。大阿母、奇妙ニ思ヒ、礼拝イタシ、身命タスカリナバ、神遊仕リ可祭上下、心中ニ祈念ス。風静ニナリ、唐ニ漂泊、翌年琉球へ帰帆ス。船ノ艫ニ、落掛リタル葛ヲ、桶ノ水ニ生ケ置、持渡リ、致帰島、又々、右ノ神遊、為有之由昔物語アリ。

事例3では船の遭難時に女神が突然出現するが、事例4では遭難時に「空中」から「神アヤゴ」が聞こえてきて、しかも「青シバト申葛」も落ちてくる。「青シバト申葛」は「ヨナフシ神遊」即ちウヤガン祭に神女が手に持つ草(手草)のことである。「大川森ノ大阿母」は不思議に思いつつ青芝に礼拝し、命が助かり帰島できるならば「神遊」を行なう決意で桶の水に生けて置いた。宮古島に戻ってから「神遊」(「ヨナフシ神遊」)をするようになった。事例4の話は恐らく神秘・奇妙なそれとして聴く者に強烈なインパクトを与えたのであろう。それ故長期間にわたり伝承された。

「神アヤゴ」が聞こえ、「青シバト申葛」が空中から落ちてくることは神の意志である。つまり、「ヨナフシ神遊」を復活させよという神の意図・意志であり、想像だにしない空中からの青シバ葛の落下はその意図の具現物であろうと大阿母は理解する。神の援助により帰島した「大川森ノ大阿母」は、神の使命を忠実に守り「ヨナフシ神遊」を復活させるわけであるが、その背景には「ヨナフシ神遊」の中断があった。祭祀の中断を心よしとしない神が、神女の危機を救い神祭の復活を暗示するのであろうか。神祭の廃止・中断は一方では人々を不安に陥れる。神の祟り・神の力を恐れる人間が、神祭の復活を望み、その代表的希望者/実践者が「大川森ノ大阿母」と解釈できないこともない。

さらに、『宮古島在番記』(一七八〇年)にも祭祀の廃止・中断で、農作業も手に付かない農民が多いので祭祀を復活して欲しい旨の要請の記事がみえる(注②)。乾隆五十八年丑年(一七九五)の八月

のことである。

両先島の儀往古ヨリ老若男女節々祈願祭事執行野原浜辺へ罷出遊事ヲモ為有之事候へ共乾隆三十二年御検使被差遣候節被召置候然ル処百姓之儀何方モ同然不断致苦勞者ニ候処右式有米儀共差留候テハ却テ相息農業等之勵ニモ不相成其上往古之旧俗相止候迪向レモ不安ニ可存事ニ候故此節ヨリ都テ跡々ノ通御免被仰付候条祈願祭事遊事等有米通執行農務夫々ノ職事猶以出精相働候様可被申渡旨御差圖ニテ候以上

祭祀の廃止・中断は人々にとって大きな関心事であったようだ。御検使による祭祀の廃止・中断は、農民を不安に陥れ、あまつさえ怠業まで引き起こすような状態になった。一種の社会不安現象が現出したのである。事態を重く見た宮古の役人は「祈願祭事遊事等」を従来通り執行できるように訴え出ている。祭祀の廃止・中断はあつてはならないことであつた。近世の社会は祭祀が単に祭祀だけに留まる時代ではなかつたのである。いわゆる、因習・迷信と呼ばれる慣習が色濃く根づいていた社会でもある。

『琉球国由来記』収載記事の「ヨナフシ神遊」の復活は、「乾隆三十二年」（一七六八年）のことではない。それ以前の出来事であり、時代を五十年遡る。何回かに亘る祭祀の禁止があつたのである。

さて、仮に事例4の話が「大川森ノ大阿母」の自作自演の狂言だとしても、その狂言を狂言と思わずに、「神アヤゴ」や「青シバト申葛」は、正に神の啓示だと捉える基盤や要請が少なからずあつたと考えられる。遭難の危機からの脱出は、空中からの「神アヤゴ」によるものとする。少なくとも「大川森ノ大阿母」は、そのように理解する。「神アヤゴ」の歌の内容については触れてない。『宮古島記事』にみえる「池間村おな崎の仲泊と申者」が謡つた「旅栄えのアヤゴ」と同内容であつたかどうか不明である。

神の謡う「神アヤゴ」と人間が謡う「旅栄えのアヤゴ」は、遭難危機からの脱出の契機である。それ故、人々は航海中の危機回避の為、予め「旅栄えのアヤゴ」を航海前あるいは航海中に切実な思いを込めて謡うようになったのであろう。

五、祭祀のなかの「旅栄えのアーグ」

旅栄えのアーグは祭祀儀礼の中で謡われる。平良市狩俣では、旧暦四月の「大世為」「御風為」、旧暦六月の「夏穂祭り」、旧暦八月の「大世為」「御風為」の各祭祀で謡われる(注⑩)。狩俣の「旅栄えのアーグ」は、上記の諸祭祀儀礼の中で謡われるようだが、「大世為」の事例をみていきたい。

「大世為」は豊稔祈願の祭祀であり、年二回旧暦四月と八月の卯の日を選んで行なわれる。それぞ

れ三日間に亘る祭りであるが、「旅栄えのアーグ」は一日目と二日目の夜にユীগムイ（夜籠り）をして
している神女達によって謡われる（注⑤）。

旅栄えのアーグ

- 1 たじばいノ
- まんチノイ あゴトシ
- 2 ふなばいノ
- まトモノイ いチドシ
- 3 きヨーノびシぬ
- かんノヒーノ ういんな
- 4 なかまモト
- うふモトが ういんな
- 5 かんソロイ
- おいソロイ さまヨてい
- 6 にかいばい さまイざ

旅栄え〈航海安全〉の
真道に乗る アーグ〈歌〉をうたいましょう
船栄え〈航海安全〉の
真道に乗る 糸音をしまししょう
今日の日の
神の日の 上には
仲間元
大元の 上には
神揃い
上揃い なされて
願い栄えを なされるのは

- うさぎばい さまイざ
- 7 なオなオゆいや あらまん
- いきやいきやノゆいや あらまん
- 8 んきやぬたや
- にだりまま やらまいば
- 9 うふぶーゆい
- かんぶゆーい やらまいば
- 10 かいまたノ いイあがイ なぎから
- かんがにぬ ういばい なぎから
- 11 ふらまがの
- にかいばい さまイざ
- 12 むむばいぬ
- うさぎばい さまイざ
- 13 なオゆいや あらまん
- いきやゆいや あらまん
- 14 シまみしら オにかい

お捧げ栄えを なされるのは
何々の理由では ありません
如何々々の理由では ありません
昔の力〈靈力〉
根立てたまま でありますから
大穂祭り
神穂祭り でありますから
狩俣の 西東の すべてから
神の根の 北南の すべてから
子孫の
願い栄えを なされるのは
百栄え〈子孫〉の
お捧げ栄えを なされるのは
何の故では ありません
如何なる故では ありません
島御梢〈子孫繁栄〉の お願いである

- むらみソラ オにかい
 15 うふゆーばい オにかい
 ていだゆんてい オにかい
 16 にかいばい さまじが
 うさぎばい さまじが
 17 だりぬシ みゆぶぎ
 やぐみかん みゆぶぎ
 18 ゆらさまい みゆぶぎ
 ぶがさまい みゆぶぎ
 19 んまぬかんモ なやぎヨラ
 やぐみかんモ なやぎヨラ
 20 ゆーむとうぬ
 うふかんモ なやぎヨラ
 21 うぶゆぬシ
 ていだよノシ なーぎヨラ
 22 ちかさかんむ

- 村御梢〈子孫繁栄〉の お願いである
 大世栄え〈豊作〉の お願いである
 太陽世満ち〈豊作〉の お願いである
 願ひ栄えを なされたからは
 お捧げ栄えを なされたからは
 根立て主の お陰で
 恐れ多い神の お陰で
 許される お陰で
 満たされる お陰で
 母の神を 名揚げ〈崇べくよう
 恐れ多い神を 崇べよう
 四元しげんの
 大神を 崇べよう
 大世主を
 太陽世主たがひを 崇べよう
 司神を
- 祭りの神〈神女〉を 崇べよう
 磯の主〈男神〉を
 生まれ神を 崇べよう
 浜の主〈女神〉と
 きれいな栄え〈神〉を 崇べよう
 真道主〈航海の神〉を
 帳簿の主を 崇べよう
 母の神の お陰で
 恐れ多い神の お陰で
 許される お陰で
 満たされる お陰で
 神々は 手摺りました
 威霊威霊は 手摺りました
 そのように祈願しても
 誰が 鳴響とよむか 決まらん
 そうするからといって

てまらから ていまらん

決まる者から 決まるだろう。

31 うふかんどう とうゆままい

大神が 鳴響まれる

やぐみよーいどう とうゆままい

恐れ多い神が 鳴響まれる

32 にかいびーどう

願う人が

うさぎびーどう なーがらでい

捧げる人が 名は揚がるのだ

「旅栄えのアーグ」は二日間ともに「元の道」「宮良の主」とセットとして、「神女たちが輪唱形式で謡っていく」ようである(注⑩)。

「旅栄え〈航海安全〉の／真道に乗る アーグ〈歌〉をうたいましよう」と冒頭で述べるが、叙述形式は対語・対句を用いている。「旅栄えのアーグ」そのものは、人の航海の様子や航海そのものの内容を直截的に叙述しているわけではない。内容的には、人間の子孫繁栄と豊作祈願を目的としており、目的成就のためのカンナギ(神名揚げ)、即ち神の寿ぎとなつている(右歌では、節の冒頭の「タウトヨー(尊い)」と節の最後の「ナーヨー(名揚げよう)」が省略されている)。神を崇敬することによって、航海の安全が保証・守護されるということよりも、神を招来し子孫繁栄と豊作祈願を目的としている。ここでの「旅栄え」は、祭の終了時に謡われるので、人間の航海とは異なる。神送りとしての「旅栄え」なのである。つまり、「大世為」儀礼の中での「旅栄えのアーグ」は神送りの機能を

はたしているといえる。

現存する詞章から見る限り、前述した伊良部町佐良浜の「たびばいのあやこ(航海安全の歌)」「旅栄えのアーグ(伊良部町佐良浜)」、慶世村恒任の採集した「旅はいのあやこ」等と比較すると、謡われる内容が異なる。これら三首は人間の航海安全を問題にするものの、狩俣の「旅栄えのアーグ」は神の航海安全を主題にしている。

「御風為」祈願祭は、大風(台風)が吹かぬよう、農作物に被害を与えない風が吹くよう、船には順風であるようにと祈願する。「大世為」儀礼の後に開始されることから、豊稔祈願、順風祈願といったように、農作物収穫を目的とした一連の儀礼と考えられる。

「御風為」は、申の日を選び、ザヤー(座家)で一晩ユークムイ(夜籠り)を行ない、「元の道」「旅栄えのアーグ」「宮良の主」の順で歌を謡う。謡われる順序は「大世為」の祭祀儀礼と同様であり、やはり神送りの機能をはたしている。

旧暦六月の「夏穂祭り」は粟の収穫祭であり、寅の日を選び五日間に亘り行なわれる。その祭りの最後の五日目にウプグフムトウ(大城元)の女のムトゥヌヤー(元の家)では、女性達により、「旅栄えのアーグ」が謡われる。やはり「元の道」「宮良の主」とセットになるが、「旅栄えのアーグ」は「夏穂祭り」でも神送りの歌となる。演唱の際、歌い手は数節謡うと床を踏み鳴らす動作が付随する。あたかも神との別れを惜しむかの如くである。

これらのことから狩俣の「旅栄えのアーグ」は、諸祭祀儀礼の中で、神送りの歌として機能していると捉えることができる。

さて、平良市西原では「旅栄えのアーグ」は、ピーティンヌヒトウユグムイ（春の一夜籠）とツサンスヌフタクグムイ（秋の二夜籠り）の儀礼で謡われる。

春の一夜籠りの祭祀儀礼を秋の二夜籠りのそれでは基本的には夜籠りを二晩繰り返す。夜籠りを伴う祭祀儀礼は、ムツダミグムイ（麦のための籠り）・ウフユダミグムイ（大世為の籠り）・ウカディダミグムイ（お風為の籠り）・ンーダミハナダミグムイ（芋の為・木綿花の為の籠り）の四つである。「旅栄えのアーグ」はこれらの祭祀儀礼実施中に謡われる。

西原の「旅栄えのアーグ」

- 1 たうとうよいい（囃子。以下、各節で繰り返されるが省略。） 尊い
 たびはいぬ かんむどう なーぎよー 旅栄えの 神を 名揚げよう
 かぎさー（囃子。以下、各節で繰り返されるが省略。） 美しさ
 あやぐやひーよ 歌を謡い
 なーぎよー（囃子。以下、各節で繰り返されるが省略。） 名揚げよう

- 2 ふなばいぬ かんむどう なーぎよー 船栄えの 神を 名揚げよう
 いちゆなしえーよ 糸音をしへ歌を謡い
 3 ばきたいが 私達が
 くぬうどうしいん そろまいやよ この御年に 揃うのは
 4 ただしえんな 只では
 あちいほぢいんな するままんよ あちいほぢいんなへ未詳
 5 かぎびゆーい 美しい日選り
 まいぬあら ゆしゆーとうい 米の粳 寄せていて（米の粳を選ぶように）
 6 かぎびゆーい 美しい日選り
 かんびゆーい ういからよ 美しい日選り
 7 ていだななちい 神日選りの 上から
 うりあなんちい どうちいからよ 太陽七つ
 8 くむいじやー 籠り座を 下り七つ 時から
 しいたていじやー ゆーあぎゆーりよ 仕立て座を よく揚げておれ
 9 くむいじやー 籠り座の
 しいたていじやーぬ ういからよ 仕立て座の 上から

- 18 がうどうらぬ
 ゆしなうし がーりゆーとうい
 19 くさきなーぬ
 びしなうし がーりゆーとうい
 20 むむたていぬ
 ななそこぬ うふゆーばー
 21 とうゆていはだ
 たらいはだ ふしやんな
 22 くがなたや
 かぎでいん うきふしやんな
 23 かんむなーぎー
 やぐみやーなーぎー がいすーやよ
 24 にかいまにやーん
 うみきまにやーん たしいきやふいさまてい
 25 あがいていだ
 うすいうや うみゆぶきよ

- 合取りが
 寄せ直しが していて
 これ程の
 座し直し していて
 百立の〈百年分の〉
 七底の 大世を
 十年分
 足りる分 欲しさ
 黄金(子孫)達は
 美しいお金 受け欲しさ
 神を名揚げ
 恐れ多い神を名揚げ 名揚げるのは
 願ったように
 お見受けしたように 助けて下さい
 上がる太陽
 被う親の お陰で

- 10 かぎどういや
 びしなうし がーりゆーとうい
 11 うふぢいかさ
 しいまぬはな うとうむしえーよ
 12 うりじやしいや
 しいまぬにーや びしゆーとうい
 13 うとうむたや
 うとうむかぎ がーりゆーとうい
 14 うやんまた
 なみかぎさ そろーまい
 15 にかやたや
 なみかぎさ がーりゆーとうい
 16 (その年の総務の干支)
 まりなうしい あがりやが
 17 やかぢいやー
 きゆーかぢいぬ ういから

- 美しい干支は
 座せ直し 準備していて
 大司の
 村の上の お供をして
 降りザシイは
 村の根は 居していて
 お供達は
 お供美しさ していて
 親母達は
 並び美しさ 揃われ
 願う人達は
 並び美しさ していて
 (例えば、申年の)
 生まれ直す 揚がる者が
 家数家(家々)の
 戸数の 上から

26 んまていだぬ
むちやぎびーぬ うみゆぶきよ
27 うばるぢいぬ

かんばなう とうゆまさ

28 ないかにが

うちやうぬしい なやぎゆーら

29 ばかばうが

んぬちいぬしい なやぎゆーら

30 んまぬはぬ

うふゆぬしい なやぎゆーら

31 ひやぢいがん

だやぢいぬしい なやぎゆーら

32 ういらむい

ういかぬしい なやぎゆーら

33 なつぶあがん

ていつぶあぬしい なやぎゆーら

母なる太陽(月)の

持ち上げ神の お陰で

大主の

最高神を 鳴響ませう

成り金の

御帳簿の主を 名揚げていよう

若王の

生命の主を 名揚げていよう

午の方の

大世主を 名揚げていよう

比屋地神を

畑の神を 名揚げていよう

ウイラ杜を

オエカ主を 名揚げていよう

ナツプア神を

ティツプア主を 名揚げていよう

34 じゃらがんみ

いちゆぬぬしい なやぎゆーら

35 びぬはしゆーゆ

いちいぬぬしい なやぎゆーら

36 やまとうがん

うじやきぬしい なやぎゆーら

37 うふやいま

はなぬぬしい なやぎゆーら

38 おーみかみ

あみぬぬしい なやぎゆーら

39 なかどうらの

ことなうい なやぎゆーら

40 まいやまぬ

うふやぐみゆー なやぎゆーら

41 うつぢいぎぬ

あぢいぬしゆーゆ なやぎゆーら

皿の嶺の

糸の主を 名揚げていよう

亥の方の主を

息(風)の主を 名揚げていよう

大和神

お酒の神を 名揚げていよう

大八重山の

端の主を 名揚げていよう

御御神

雨の主を 名揚げていよう

中取りの

事直りを 名揚げていよう

前山の

大神を 名揚げていよう

ウツチイキの

按司の主を 名揚げていよう

42 びっしむい

かりゆーしいぬしい なやぎゆーら

43 しらかぶーぬ

くみぬぬしい なやぎゆーら

44 にしびしゆーゆ

うふやぐみゆー なやぎゆーら

45 あがいじやーぬ

うふやぐみゆー なやぎゆーら

46 うふやいま

うむとうがん なやぎゆーら

47 うふとうがん

うふやぐみゆー なやぎゆーら

48 かぎはまぬ

うふやぐみゆー なやぎゆーら

49 いちいちむいぬ

まんちいぬしい なやぎゆーら

広瀬社の

嘉例吉主を 名揚げていよう

白川湾の

米の主を 名揚げていよう

西銘主を

大神を 名揚げていよう

東座の

大神を 名揚げていよう

大八重山の

オモト神を 名揚げていよう

大渡神の

大神を 名揚げていよう

美しい浜の

大神を 名揚げていよう

イチイチイ杜の

真道主を 名揚げていよう

50 んちいだちいぬ

うふやぐみゆー なやぎゆーら

51 うふらだちい

やまとうがん なやぎゆーら

52 とうくがーんみ

いちいぬぬしい なやぎゆーら

53 とうゆんみやーぬ

きんみぬしい なやぎゆーら

54 とうぬはしゆー

きんくぬしい なやぎゆーら

55 とうくぬぬしい

ふだみびーゆ なやぎゆーら

56 かぎみぢいぬ

うふやぐみゆー なやぎゆーら

道立の

大神を 名揚げていよう

大浦立の

大神を 名揚げていよう

トウクガー嶺の

息(風)の主を 名揚げていよう

鳴響む庭の

吟味主を 名揚げていよう

トウヌハ主を

金庫主を 名揚げていよう

所主を

踏み鎮め神を 名揚げていよう

美しい水の

大神を 名揚げていよう

西原の「旅業えのアーグ」は、夜籠りの時、ウハルヂイウタキ(大主御嶽)のウドウヌ(御殿)の

中で、ナナムイヌンマ（七杜の母）によって謡われる（注⑩）。七杜の母は座したままで謡う。その際には各自持参のツティー（煙管）を右手に持ち（その煙管を地に付け、吸口を上にして）謡う。神はその祭祀儀礼に参加した人を煙管で確認し、煙管を数えることにより参加した人数を確認するといわれる。

「旅栄えのアーグ」は、夜籠りの時ウドウヌ（御殿）の中で一番最初に謡われるので、神迎えの歌といえる。神は歌の三〇数節から登場するといわれ、演唱中その節になると七杜の母は全員頭を下げる所作をする。

西原の「旅栄えのアーグ」の冒頭部分は狩俣のそれとは若干異なる。「船栄えへ航海安全」を名揚げ 糸音へ歌をうたいましよう」と述べるが、「旅栄えのアーグ」そのものは、狩俣同様人間の航海の様子や航海そのものの内容を直截的に叙述しているわけではない。内容的には、人間の子孫繁栄と豊作祈願を目的としており、目的成就の為のカンナーギ（神名揚げ）、即ち神の寿ぎとなっている。神を崇敬することによって、航海の安全が保証・守護されるということよりも、神を招来し子孫繁栄と豊作祈願を目的としているのだから、ここでの「旅栄え」とは人間の航海とは異なる。神迎えとしての「旅栄えのアーグ」といえる。

狩俣と西原の例から祭祀の中で謡われる「旅栄えのアーグ」は、地域により神迎え、あるいは神送りの歌として機能していたのである。だが、「旅栄えのアーグ」は神迎えあるいは神送りとは別に、

首里王府への貢納・納税とは無関係の歌ではないだろう。

『御嶽由来記』では、「二月中ニ麦初御祭」「四月中ニ米粟初御祭」が催される。初御祭とは初穂祭のことであろう。麦・米・粟の初穂祭が二月と四月に行なわれるならば、それぞれの収穫祭はその一カ月後には行なわれる。

『与世山親方宮古島規模帳』（注⑪）には、次のような下知がなされている。

- 一、毎年上納米之儀二月より村々其手組申付置大和船並馬艦船下着次第積荷無滞相渡三月より四月迄順風次第出帆可申渡事

「上納米」を荷積みしたら、三・四月の順風を待つて出帆せよ、ということである。この場合の「上納米」は昨年収穫した米であろう。米の他に麦を荷積みしたのかもしれない。また、

- 一、地船之儀春立仲立者四月中後立ハ五月中致上着候様諸事仕廻方差急出帆可申渡事

とある。「春立仲立」とは、春立船と仲立船のことであり、近世期に宮古・八重山諸島と那覇を往復した貨納物輸送を基本とする公用船のことである（注⑫）。これらの船は、三月から五月にかけて往来し

ている。つまり、季節風を頼りに航行したのであった。積み荷は、米・麦・粟等であった。「御嶽由来記」記載の一六の御嶽での「船路の為」の祈願はこの公用船の為にも行なわれたのであろう。

前述したように、伊良部島の事例では、首里王府に貢納物を納めに行く祭には、見送る人は航海安全の祈願をし、「たびばいのあやこ」を謡った。人々は恐らく、まず御嶽で祈願し、その後船の見える場で歌を謡ったものと思われる。伊良部島の「たびばいのあやこ」は、御嶽では神迎えあるいは神送りの歌として機能していたが、御嶽を離れた場では航海安全の歌としても用いられるようになったのだらう。歌の機能の転用である。狩俣・西原の「旅栄えのアーグ」も祭祀の場から、島外へ出る人の為にも謡われるようになったのである。

六、最後に

「旅栄えのアーグ」は、御嶽では神迎えあるいは神送りの歌として機能している。港を出港する際には航海安全の歌となる。危機に瀕した時には、危機を回避する力を持つ歌になる。危機からの脱出の為に神に願い乞うのだが、それは以下に述べるように宮古特有の現象ではない。危機を回避の時には歌でなければならぬようだ。だが、何故歌なのか。

『球陽』巻四、尚清王代（一五二七―一五五五年）の付記に、首里湛氏の数明親雲上が、「神唄頭」になったということが記してある。即ち、尚清王久高島行幸の時、湛氏は神酒司頭として随行してい

た。久高島からの船での帰途、風雨がはげしくなり、あまつさえ波は高くなり、方角も分からなかった。その時、湛氏が舳先に立ち、神歌を謡うと波静かになり、船は無事与那原に着いた。そのことにより、湛氏は家来赤頭職に抜擢され、「神唄頭」になったという。おもしろ主取り家の祖先に纏わる伝承である（注⑩）。

ことの真偽はともあれ、船が遭難しそうになった時、神歌を謡うと波静かになり、船は無事目的地に着いたということである。また、その言説を受け入れる下地があることも忘れてはならない。危機を乗り越える手段・方法として神歌がある。

さて、『中山世鑑』（注⑪）に、王権交代が描かれている場面がある。尚宣威王の即位の時、尚宣威は玉座に座り、久米中城王子（尚真王）はその側に立っていた。尚宣威は、自分の慶賀の為に陽神キミアズリが現れたと喜んだ。旧例には、君々・神々は内原より出て、キミホコリ（君誇り。建物の名称）の前に立つが、今回は例に変わり、西向きに立った。居並ぶ人々が、肝を冷やし手に汗を握り、固唾を飲んでいると、託宣があった。オモロであった（注⑫）。

しよりゑと節

一、首里 おわる てだこが

思ひ子の遊び

神女の行為とオモロを聴いた尚宣威は、自分には王になる徳がないと判断し、久米中城王子（尚真王）に王位を譲った。

久米中城王子（尚真王）の側の策略があつたにせよ、神歌は絶大なる効果があつた。オモロは神の意志であつたのだ。歌は神へ訴えるものであると同時に神の意志でもあると捉えられてきた。それ故、神歌であるオモロは人々に神の意志と理解され、王権の交代も認められたのである。神歌は王も脅かす。それほど力あるものと信じられていた（注⑨）。

神は畏怖すべきものでありかつまた祟りなすものであつた。それ故崇め奉られる存在であつた。人とは異なる〈超〉自然としてのそれであり、王府や共同体の描く理想の世界をもたらし得るものでもある。従つて、その言葉も必然的に日常の言語とは異なつた別の言語秩序を有していた。対語・対句を用いた表現技法はその一つの言語表出である。神を語る場合にはそれ故対語・対句を用いた叙述が必要とされた。危機からの脱出あるいは望むべく理想の世界の実現のためには「神への言語」「神の言語」が用いられた。「旅業へのアーク」はその一つの典型であつたのだ。

注

- ① 真栄平房昭「近世琉球における航海と信仰——「旅」の儀礼を中心に」『沖縄文化』七七号 沖縄文化協会 一九九三年。
- ② 引用は、平良市史編さん委員会『平良市史』第三巻資料篇1前近代 平良市教育委員会 一九八二年。尚引用に際し、明らかな誤字・誤植は訂正し、旧漢字は新漢字になおした。
- ③ 豊見山和行「航海守護神——媽祖神・観音・聞得大君」『海のアジア』5越境するネットワーク 岩波書店 二〇〇一年。
- ④ 広瀬御嶽・中間御嶽・浦底御嶽については、後日別稿をしたためたい。
- ⑤ 拙論「宮古島の祭祀歌謡からみた女神」『日吉紀要 言語・文化・コミニケーション』二六号（慶應義塾大学）二〇〇一年を参照されたい。
- ⑥ 引用は、外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成III宮古篇』 角川書店 一九七八年。
- ⑦ 東條操編 東京堂出版 一九八七年。
- ⑧ 池宮正治「渡唐船の準備と儀礼」『第七回中琉歴史関係国際学術会議論文集』 中琉文化経済協会出版 一九九一年。
- ⑨ 大川恵良『伊良部郷土誌』自家版 山一出版印刷社 一九七四年。
- ⑩ 注⑨に同じ。歌の引用にあたり、改行も施した。また、口語訳は適宜改めた。

- ⑪ 注④に同じ。
- ⑫ 故親泊カナさん(西原出身。明治四五年生)談。神役ムヌシイ(物知り)経験者。
- ⑬ 引用は、注②に同じ。
- ⑭ 球陽研究会編 『球陽』原文篇・読み下し篇 角川書店 一九七四年。
- ⑮ 注①に同じ。
- ⑯ 日本放送協会【編】『日本民謡大観(奄美・沖縄) 宮古諸島篇』 日本放送出版協会 一九九〇年。
- ⑰ 一七四八年成立。引用は、注②に拠る。
- ⑱ 一七三六―一七九五に成立。引用は、注②に拠る。
- ⑲ 慶世村恒任 『宮古史伝(初版復刻)』 吉村玄得発行 一九七六年。
- ⑳ ニコライ・A・ネフスキー 『宮古のフォークロア』(狩俣繁久・渡久山由紀子・支倉隆子など共訳) 砂子屋書房 一九九六年。歌謡の引用は、訳者のそれを用いる。テキストが横書きであるので、「む」などは引用に際し「む」とする。
- ㉑ 『御嶽由来記』 一七〇五年。引用は、注②に拠る。
- ㉒ 一七二三年成立。引用は、外間守善・波照間永吉編 『定本琉球国由来記』 角川書店 一九九七年。
- ㉓ 一三六八―一八九三年成立。引用は、注②に拠る。
- ㉔ 引用は、注⑥所収の「狩俣部落の神祭りと年中行事」(新里幸昭)。

- ㉕ 引用は、注⑥に拠る。本歌は、仲間元(女)で演唱される「旅菜えのアーグ」と思われる。大城元、志立元、仲間元でも謡われるが、全く同一の詞章であるかどうかは未確認。引用に際し、便宜上歌の節番号の漢数字を算用数字に直した。口語訳を変えた部分もある。
- ㉖ 注⑥所収の「狩俣部落の神祭りと年中行事」(新里幸昭)。
- ㉗ 拙論「宮古島西原のユーグムイ歌謡について」 沖縄国際大学 南島文化研究所 『宮古、平良市調査報告』(一) 地域研究シリーズ第三号 一九九六年。
- ㉘ 『与世山親方宮古島規模帳』一七六八年。引用は、注②に拠る。
- ㉙ 『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 一九八三年。
- ㉚ 池宮正治 『宜野湾市史』第4巻(資料編3)『宜野湾とおもろ・おもろ主取』 一九八五年。小島櫻禮編 『神道大系』神社編五二 神道大系編纂会 一九八二年。
- ㉛ 『琉球史料叢書』 東京美術 一九七二年。概訳は引用者による。
- ㉜ 便宜上、岩波文庫版の『おもろさうし』 岩波書店 (二〇〇〇年)を用いる。
- ㉝ 波照間永吉 『琉球文学にみる憑霊表現―憑霊説話と神託をめぐって―』 『奄美沖縄民間文芸研究』第23号 奄美 沖縄民間文芸研究会 一九九九年三月。

【付記】

本稿の「二、近世の航海」は、南島史学会の宮古島大会（二〇〇〇年二月二日）で口頭発表したものである。また、「三、船旅とタビパイヌアーク」は、二〇〇一年一〇月の沖縄研究国際シンポジウム（文学部会）で口頭発表したものである。本稿を発表するにあたり、いずれも補筆訂正を施した。